

孔子の考えるリーダーのあり方「仁者は憂えず」

リーダーとはどのような人物のことを言うのだろうか？

孔子はリーダーのあり方を弟子から問い掛けられ、ある時は仁者、ある時は君子、そしてある時は士、と答えている。

「仁者は憂えず」と孔子は言った。

人の道を極めた人、思いやりのある人を仁者と言う。

仁者をリーダーと考えれば「憂えず」とはいったいいかなることを言うのか。それは嘆き悲しんだり、憂鬱になったりすることがないということだけではない。

仁者は、私欲がなく、天の意思に従っているから余裕があり、何よりもユーモアがあるということだ。

すなわちリーダーとは、どんな厳しい状況に置かれても、嘆き悲しむことなく、楽天的で、ユーモアがあり、人々に勇気を与え、導くことができる人だと孔子は言う。

ユーモアを利用した戦い方

スペインのサッカーチーム、FCバルセロナに所属するブラジル代表のダニエウ・アウヴェス選手は、客席からスタジアムに投げ入れられたバナナを拾って食べた。

バナナは人種差別の象徴。

相手をサルだと差別する意味を含んでいた。

普通は、怒り、嘆き、差別した相手を攻撃するだろう。

しかし、彼は、馬鹿な奴にはユーモアで対抗するのが一番だと考え、バナナを食べるというパフォーマンスを行った。

この行為は、世界で称賛され、バナナを食べることが人種差別と戦う象徴的行為となった。

ダニエウは、素晴らしい仁者であると言えるだろう。

人種差別という悪辣な行為に嘆きや怒りではなく、ユーモアで対抗したのだから。

2014年4月27日に行われた**ビジャレアル CF 対バルセロナ戦**で、コーナーキックに向かうアウベスに対して、観客席から**バナナ**が投げ込まれた。

まぎれもない人種差別的行為に、アウベスは実にユニークな対抗策を見せた。

なんとピッチ上に落ちたバナナを拾い上げ、皮をむいてそのまま口に放り込んで食べてしまったのだ。

何事もなかったかのようにプレーに戻り、アウベスはすぐさまコーナーキックに移る。

これを受けてブラジル人チームメイトの**ネイマール**も続けざまにアクションを起こす。

試合後、息子と一緒にバナナを食べる写真をソーシャルメディア上で投稿。

これがリーグや国籍を超えて瞬く間に拡散される。

世界の有名サッカー選手が、バナナを食べるポーズを次々と投稿し、グローバルレベルの大きな反響を呼んだ。

かつて、日本も一部のアメリカ人から「イエローモンキー」と蔑視され人種差別されたこともある。

映画では有名な「猿の惑星」。この作品は、ある意味、日本人を意図した比喻でもある。

原作者ブールは(フランス領インドシナ)で日本軍の捕虜にされた実体験から、異常な日本人嫌いになり、元々白人優越主義で下等動物の日本人に檻に入れられた恐怖から過激な黄禍論にハマってしまった。

彼の作品はまず日本に対する異常な憎悪から始まる。

彼の持論はとにかく日本人を野放しにしておくことと必ず軍事、経済的に災いをなすため至急絶滅をしないと映画の猿のように地球を制服支配されると主張している。